横浜市民ギャラリーコレクション展 2025

コレクションの地層 Historical Layers of the Collection

横浜市民ギャラリー Yokohama Civic Art Gallery

ごあいさつ

横浜市民ギャラリー開館60周年となる今年度のコレクション展は、「コレクションの地層」をテーマに、当館所蔵作品の収集過程に着目したトピックを通して、その幅広い魅力をご紹介します。
当館が所蔵する約1,300点のコレクションは主に、1964年の開館から1990年代半ばまでの間に企画展や国際交流展の開催を機として収蔵されました。本展では、当館が桜木町駅前に所在した最初期（1964～1974年）に収集された絵画などの作品を取り上げるほか、二代目市民ギャラリー時代に開催された「ヨコハマ漫画フェスティバル」（1978年）で漫画家らが一堂に会し描いた横浜にまつわる一コマ漫画のコレクション、そして1980年代後半よりまとまった収集が行われ、コレクション内で最多点数を成す多彩な写真作品を展示します。
また小特集では、当館とゆかりの深い画家・福島瑞穂の作品をご覧いただきます。30年以上にわたり集積されたコレクションの歴史を感じながら、その地層の断面を探索するようにお楽しみください。
最後になりましたが、本展のためにご尽力いただいた関係者、関係機関の皆様に心よりお礼申し上げます。

横浜市民ギャラリー

Section 1

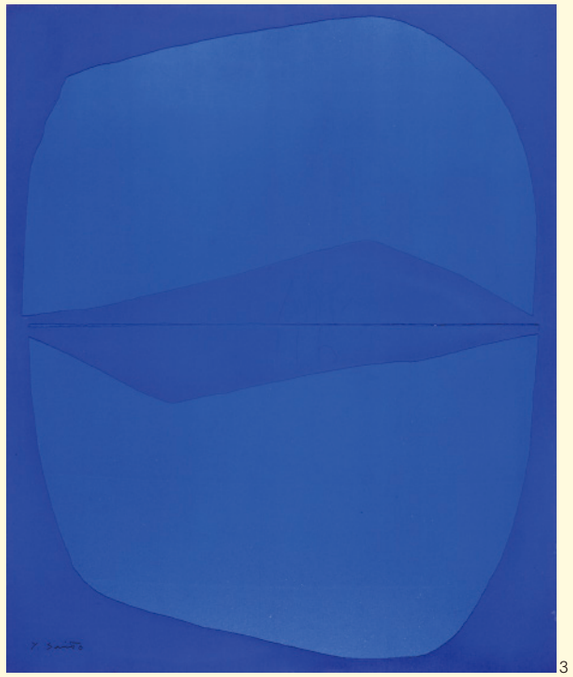
初代横浜市民ギャラリー期の収集作品 ―1974年まで

横浜市民ギャラリーは1964年4月、旧中区役所を改装した建物内に誕生しました。当時の飛鳥田一雄(1915–1990)市長は「現代美術館構想」を持っていましたが、美術団体からの要望も受け、市民が作品発表を行う一方企画展も実施する施設となりました。「市民ギャラリー」という名称は初代館長で詩人の山田今次(1912–1998)が考案したといわれます。“ギャラリー”は展示場を意味します。作品の収集は本来“ミュージアム”ー美術館が行いますが、1989年に横浜美術館が開館し収集活動が集約されるまで、横浜市民ギャラリーがその機能を担いました。第1章では、初期の10年間にコレクションとなった作品群をご紹介します。

添田定夫《箱根風景》(1964年)は、横浜市民ギャラリー開設記念として開催された「横浜総合美術展」(1964年4月2〜19日)の出品作で、添田は市内の学校での教職の傍ら油彩を中心に描きました。岡本太郎《まひる》(1963年)は、横浜市民ギャラリーでの個展第一弾、「岡本太郎展」(1967年)を機に収蔵されています。初期の収集対象は「日本現代の作家並びに本市在住作家の作品」(昭和41年度資料)でした。院展で活躍した中島清之、先駆的な抽象表現で知られ神奈川県女流美術家協会を創立した江見絹子、もの派にも影響を与えた斎藤義重など、作家の所属団体のバランスを考慮しながら幅広く収集した様が見てとれます。

1

2


3

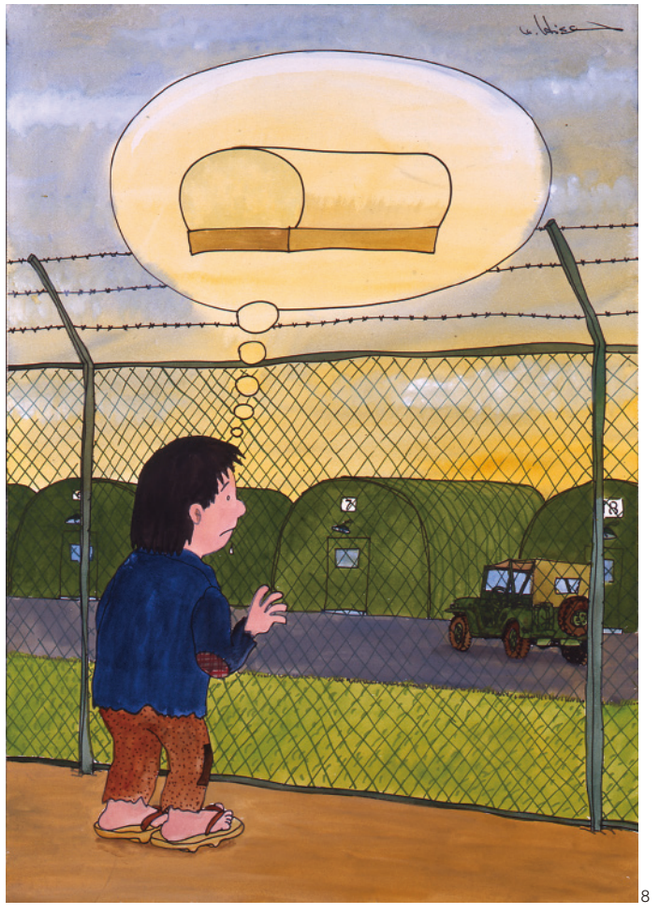
4

5

6

1 岡本太郎《まひる》1963年 油彩、キャンバス 91.1×73.1cm
2 中島清之《聖壇》1964年 紙本着彩 62.7×52.5cm
3 斎藤義重《ボウバンC・青》1971年 合成樹脂、アルミ板 72.3×60.3cm
4 國領經郎《真鶴風景》1967年 油彩、キャンバス 89.2×115.1cm
5 江見絹子《水尾》1974年 油彩、キャンバス 79.0×99.0cm
6 添田定夫《箱根風景》1964年 油彩、キャンバス 65.4×90.8cm

7


8

9

©やなせたかし

7 前川かずお《牛なべこと始め》1978年
水彩、マジック、紙 72.1×102.5cm
8 ヒサクニヒコ《占領下の伊勢佐木町［カマボコ兵舎の林立］》
1978年 マジック、水彩、アクリル、紙 102.5×72.3cm
9 やなせたかし《港の花》1978年
アクリル、紙 102.6×72.5cm

漫画コレクション ―1978年ヨコハマ漫画フェスティバル

1974年、横浜市民ギャラリーは関内駅前に新設された横浜市教育文化センター内に移転し、再スタートを切りました（2013年3月まで同地に所在）。4年後の1978年には横浜市の都心部強化事業の一環として施設前に大通り公園が整備され、その完成記念事業「ヨコハマ漫画フェスティバル」（1978年9月15日～10月4日）が行われました。柳原良平を中心に企画されたこの展覧会は、〈漫画集団〉*のメンバーら当時活躍中の漫画家やイラストレーターが展示室に集まり、横浜にまつわる一コマ漫画を現地制作し展示するというユニークなものでした。現在、出品作品76点が収蔵され、当館ならではのコレクションとして存在感を放っています。

制作にあたっては、横浜に関する歴史や事始め、観光地、現代や未来の横浜など、いくつかのテーマが設けられました。横浜発祥とされる牛鍋を初めて食す人たちを滑稽に描いた前川かずお、幼少期から戦後の横浜を見つめてきたヒサクニヒコが描くカマボコ兵舎のある風景など、題材選びから表現スタイルまで、作家の個性が光ります。

＊〈漫画集団〉
大人向けの漫画を描く漫画家たちによる親睦団体。1932年に近藤日出造（1908–1979）、杉浦幸雄（1911–2004）、横山隆一（1909–2001）ら20名の若手漫画家が「新漫画派集団」を結成、終戦後の1945年に「漫画集団」へと改名し再発足した。全国各地での展覧会開催や出版活動などをおこない、50周年を迎えた1982年には99名が所属した。

10

11

10 柳原良平《新港埠頭赤煉瓦倉庫》1978年
ポスターカラー、紙 72.2×102.5cm

11 「ヨコハマ漫画フェスティバル」記録映像より
左：会場の様子　右：作品制作風景　1978年

Section 3

12

写真の収集 ―1980年代以降の新たな地層

横浜市民ギャラリーでは現在360点の写真作品を所蔵しており、コレクション内で最多のジャンルとなっています。1970年代末以降、美術館での写真収集の機運が高まり、1989年に開館した横浜美術館では、作品を収集するとともに写真展示室を設置、翌年には写真を専門とする東京都写真美術館（一次施設）が開設されるなどの動向がありました。当館では1977年、横浜育ちの写真家・土門拳の個展開催時に《宝生寺金堂十一面観音立像頭部》（1974年）が寄贈され、最初の写真作品の収蔵となりました。その後は主に80年代後半から90年代初頭にかけて集中的に作品が収集され、コレクションの魅力を広げる新たな地層が加わりました。

本章前半では、土門の個展に続き当館でも次々と開催されるようになった、写真家の個展を契機とする収蔵作品を紹介します。大和路とその自然を愛した入江泰吉、戦中・戦後の様相を鋭くとらえた林忠彦、ポートレートの名手・秋山庄太郎、そして浜口タカシと奥村泰宏が記録した戦後横浜の歩みと、昭和を映し出すバラエティ豊かな作品が並びます。

後半は、計228点の作品収蔵につながった二つの国際交流展「横浜市美術展『横浜百景・横浜書展』」（1988年、上海）、「現代日本の版画と写真の展開～いまヨコハマから～」（1992年、コンスタンツァ、ブカレスト/ルーマニア）の出品作より、海外展のため選出された写真家たちが写した、日本の都市と地方、横浜の風景を展示します。

13

14

15

12 林忠彦《坂口安吾》1947年
ゼラチン・シルバー・プリント 23.2×23.2cm
13 入江泰吉《長谷寺錦秋》1979年
カラー・プリント 73.4×93.2cm
14 北井一夫《川魚漁師》1975年
ゼラチン・シルバー・プリント 26.7×39.2cm
15 浜口タカシ《本牧埠頭》1988年
カラー・プリント 36.2×54.5cm
16 奥村泰宏《帰還兵とGI》1950年
ゼラチン・シルバー・プリント 33.7×33.6cm
17 五十嵐英壽《大都会のムラ》1988年
ゼラチン・シルバー・プリント 53.4×42.7cm

16

17

小特集　福島瑞穂

福島は1936年広島県尾道市生まれ。大学入学前の1953年に独立展で初入選して以来、同展への出品を続けています。1959年に女子美術大学芸術学部洋画科を卒業すると、教育実習先の福山暁の星学院で才能を見込まれ、同学院の母体であるマリー・オクシリアトリス修道会の本部があるパリへ4年間派遣され絵画を学びました。若くして画家としての頭角を現していた福島でしたが、当時は次に何を描いたらよいかわからないというスランプに陥っており*、この留学は画家としての成長を求めてのことでした。彫刻家のオシップ・ザッキン（1890–1967）から指導を受け、自身の表現を模索する中で導かれた大胆な肉体表現や主題は、彼女の作品を特徴づけています。
横浜市民ギャラリーでは1977年に個展を開催したほか、当館の主催するグループ展などに出品しています。1979年に開催された「横浜百景展」では、当時の緑区に取材した作品を制作してほしいという依頼を受け、《子供の国》など3点の水彩作品を制作しました。

＊出典「青春プレイバック 福島瑞穂」新美術新聞（1004号）2003年10月1日発行

福島 瑞穂（ふくしま・みずほ）プロフィール

1936年　広島県尾道市生まれ
1953年　独立展初入選
（1959年に独立会会友となる。同展での受賞多数）
1959年　女子美術大学芸術学部洋画科卒業
1961年　福山暁の星学院（広島）での教育実習を経て、マリー・オクシリアトリス修道会よりフランス、パリへ留学。滞在中にサロン・ドートンヌへの出品のほか、個展を開催
1964年　ル・サロンでオノレ賞（佳作）受賞
1965年　帰国
1977年　「福島瑞穂展」（横浜市民ギャラリー）
1986年　安井賞で佳作受賞
1988年　横浜市民ギャラリー絵画（実習）教室講師（～2008年）
「横浜・上海友好都市提携15周年記念 横浜市美術展『横浜百景・横浜書展』」（上海美術館）出品
1989年　広島市現代美術館開館記念展「広島・ヒロシマ・HIROSHIMA」（広島市現代美術館）出品
1990年　「横浜・オデッサ姉妹都市提携25周年記念 横浜美術展」（オデッサ東西美術館/旧ソビエト連邦・現ウクライナ）出品
1998年　文化庁芸術家特別在外研修員
（パリ、コルマール/フランス）
2009年　文化庁長官表彰（これを記念して2011年に「福島瑞穂の世界展」を日本橋三越本店で開催）

上記の他、国内外での個展・展覧会出品、受賞等多数。主な作品収蔵先に神奈川県立近代美術館や広島市現代美術館など。

18

18 福島瑞穂《出港》1988年
油彩、キャンバス 117.0×117.0cm
19 福島瑞穂《子供の国》1979年
ガッシュ、岩絵具、紙 46.6×34.8cm

19

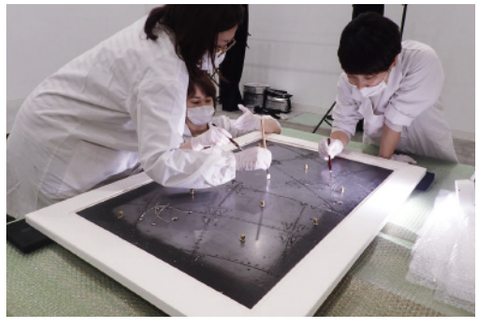
作品を守り、伝える取組み ― 保管と修復

横浜市民ギャラリーの所蔵作品は制作から時間が経ったこともあり、修復を要するものが散見されます。当館では、学芸員によるIPM※点検をはじめ、作品を保管する収蔵庫の温湿度の維持、こまめな清掃や施設内の目配りなどを通じて、日頃より環境に留意し作品を管理しています。また、修復の専門家による修復や、安全性を確認しながら職員もクリーニングを実施しており、本展出品作の一部も展示に備えて修復・クリーニングをおこないました。

※IPM（Integrated Pest Management 総合的有害生物管理）…複数の防除手段を合理的に併用し、文化財にとっての有害な生物が施設内に侵入するのを防ぎ、カビを生育させないという予防を第一とする方法（平成27年 文化庁『文化財（美術工芸品）保存施設、保存活用施設 設置・管理ハンドブック』より）

IPM点検（付着カビ調査）

IPM点検時の清掃



専門家による作品修復

福島瑞穂《出港》裏面のクリーニング

クラウドファンディング

2022年度には、所蔵作品2点の修復のためにクラウドファンディングをおこないました。詳細は、右の報告書や、修復内容を収めた動画よりご覧いただけます。所蔵作品は横浜市や市民の皆さんの財産です。より良い状態で未来に残すために、横浜市民ギャラリーの取組みを応援いただけますと幸いです。

＼報告書はこちら／

＼動画はこちら／

Chronology

収集関連年表 ―作品収蔵の契機や基盤となった主な展覧会、所蔵作品にまつわる出来事

年	月	出来事
初代施設		
1964（昭和39）	3月	最初の寄贈とされる作品の収蔵（添田定夫《箱根風景》）
	4月	**横浜市民ギャラリー開館（初代施設/桜木町駅前）** **開設記念「横浜総合美術展」**
	6月	現代美術展**「今日の作家展」**の開始（2006年まで全40回）
1967（昭和42）	3月	横浜在住作家によるグループ展**「新人の美術招待展」**の開始（1988年まで全9回）
		最初の購入作品の収蔵（兵藤和男《古樹新緑》）
	9月	**個展シリーズ**の開始（1999年まで92回［主催者判明分］）。初回は**「岡本太郎展」**
1968（昭和43）	3月	横浜在住作家による集団個展シリーズ**「春雷展」**の開始（1986年まで名称を変え全7回）
二代目施設		
1974（昭和49）	7月	**横浜市教育文化センター内に移転（二代目施設/関内駅前）** 施設内に設けられた収蔵庫で所蔵作品を保存・管理開始
1978（昭和53）	2月	**所蔵作品展**を初開催（会場：横浜市民ギャラリー）
	10月	**「ヨコハマ漫画フェスティバル」**の出品作品・漫画76点が寄贈される
1979（昭和54）	5月	開港120周年記念行事**「横浜百景展」**の出品作品・水彩素描128点が寄贈される
1985（昭和60）	12月	**「横浜在住書家選抜展」**の出品作品・書41点が寄贈される
1986（昭和61）	7月	横浜市内の区民文化センターなどでの**所蔵作品巡回展**の開始（2003年まで全28回）
1988（昭和63）	12月	横浜・上海友好都市提携15周年記念**「横浜市美術展『横浜百景・横浜書展』」**の 出品作品・絵画70点、版画73点、写真109点（計252点）を購入
1989（平成元）	11月	横浜美術館開設。作品収集機能が次第に横浜美術館に移管される
1992（平成4）	12月	横浜・コンスタンツァ姉妹都市提携15周年記念**「現代日本の版画と写真の展開～いまヨコハマから」展**の 出品作品・版画136点、写真119点（計255点）を収蔵
2002（平成14）	2月	横浜市民ギャラリーでの所蔵作品展が年1回に定例化（2007年より「コレクション展」の名称）
2013（平成25）		施設移転に伴い、所蔵作品の全件調査を実施（～2014年）
三代目施設		
2014（平成26）	10月	**現在地に移転（三代目施設）**
2022（令和4）	5月	作品修復のためのクラウドファンディングを実施※
	7月	「横浜市こどもの美術展」内で**「こどものためのコレクション展」**開始

※作品修復は資料で確認できる限り1990年代より実施。現施設においては2013～2014年度の作品全件調査をもとに、年間数点ずつ修復やクリーニングを実施している。

初代横浜市民ギャラリー外観 1966年

「横浜市民ギャラリー収蔵作品展」二代目横浜市民ギャラリー 1993年

List of Works

出品リスト

作家名	作品名	制作年	技法	サイズ（縦×横×奥行）cm／時間
1. 初代横浜市民ギャラリー期の収集作品 ―1974年まで				
入江 正巳	華虹門	1973	紙本着彩	81.0×101.0
江見 絹子	水尾	1974	油彩、キャンバス	79.0×99.0
遠藤 典太	運河（石川町）	1969	油彩、キャンバス	91.5×73.5
大野 増穂	Work 73-3-18	1973	アクリル、キャンバス	162.2×130.6
岡田 青慶	礁 B	1969	紙本着彩	200.8×165.1
岡本 太郎	まひる	1963	油彩、キャンバス	91.1×73.1
垣内 治雄	早春裸婦	1971	ブロンズ	56.0×12.5×16.5
川島 実	横浜港	1971	油彩、キャンバス	45.5×60.6
國領 經郎	真鶴風景	1967	油彩、キャンバス	89.2×115.1
小島 一谿	城ケ島　潮騒朝	1971	紙本着彩	53.6×65.4
斎藤 顕治	擬態	1965	鉄	60.0×58.0×58.0
斎藤 義重	ボウパンC・青	1971	合成樹脂、アルミ板	72.3×60.3
斎藤 義重	ボウパンA・白	1971	合成樹脂、アルミ板	72.7×60.6
添田 定夫	箱根風景	1964	油彩、キャンバス	65.4×90.8
中島 清之	聖壇	1964	紙本着彩	62.7×52.5
田代 利夫	アメリカの形70-2	1970	油彩、キャンバス	162.3×130.7
日向 茂生	夕陽の運河	1969	油彩、キャンバス	45.5×60.5
兵藤 和男	古樹新緑	1965	油彩、キャンバス	61.0×72.9
2. 漫画コレクション ―1978年ヨコハマ漫画フェスティバル				
ヒサ クニヒコ	占領下の伊勢佐木町［カマボコ兵舎の林立］	1978	マジック、水彩、アクリル、紙	102.5×72.3
前川 かずお	牛なべこと始め	1978	水彩、マジック、紙	72.1×102.5
森田 拳次	ブルース	1978	マジック、水彩、紙	102.4×72.4
矢尾板 賢吉	おむかえ	1978	木炭、紙	102.5×72.3
八島 一夫	横浜大空襲500機［450まで数えられるってどうでもよいのよ早く逃げて］	1978	マジック、水彩、紙	102.7×72.4
柳原 良平	新港埠頭赤煉瓦倉庫	1978	ポスターカラー、紙	72.2×102.5
やなせ たかし	港の花	1978	アクリル、紙	102.6×72.5
―	「ヨコハマ漫画フェスティバル」記録映像	1978	映像	14分59秒
3. 写真の収集 ―1980年代以降の新たな地層				
秋山 庄太郎	岸惠子	1958	ゼラチン・シルバー・プリント	34.4×24.8
秋山 庄太郎	山田五十鈴	1968	ゼラチン・シルバー・プリント	23.9×23.3
五十嵐 英壽	大都会のムラ	1988	ゼラチン・シルバー・プリント	53.4×42.7
入江 泰吉	長谷寺錦秋	1979	カラー・プリント	73.4×93.2
奥村 泰宏	帰還兵とGI	1950	ゼラチン・シルバー・プリント	33.7×33.6
奥村 泰宏	撤去された米軍兵舎跡	1956?1955?	ゼラチン・シルバー・プリント	29.3×44.7
北井 一夫	川魚漁師	1975	ゼラチン・シルバー・プリント	26.7×39.2
木下 陽一	聖母祭（長崎県田平）	1991	カラー・プリント	37.0×54.2
須田 一政	東京-1980	1980	ゼラチン・シルバー・プリント	52.4×40.2
須田 一政	東京-1980	1981	ゼラチン・シルバー・プリント	52.4×40.2
田沼 武能	成人の日の下町娘	1992	カラー・プリント	53.7×35.7
常盤 とよ子	たそがれ	1988	ゼラチン・シルバー・プリント	45.6×55.9
土門 拳	宝生寺金堂十一面観音立像頭部	1974	カラー・プリント	105.0×74.5
芳賀 日出男	太鼓の祭	1991	カラー・プリント	42.8×53.8
英 伸三	出稼ぎに行く農民―秋田県羽後本荘駅で	1970	ゼラチン・シルバー・プリント	50.8×36.0
浜口 タカシ	最後の移民船	1973	ゼラチン・シルバー・プリント	36.7×49.9
浜口 タカシ	「俺たちに仕事をくれ」メーデー行進	1974	ゼラチン・シルバー・プリント	50.1×36.7
浜口 タカシ	本牧埠頭	1988	カラー・プリント	36.2×54.5
林 勇	栄区点描（戸塚町）	1988	ゼラチン・シルバー・プリント	45.8×55.8
林 忠彦	空の護り 松戸飛行場	1941	ゼラチン・シルバー・プリント	28.1×23.4
林 忠彦	坂口安吾	1947	ゼラチン・シルバー・プリント	23.2×23.2
林 忠彦	箱根旧街道杉並木	不詳	カラー・プリント	23.4×35.3
藤倉 忠明	緑園都市旭区の早春	1988	ゼラチン・シルバー・プリント	35.4×53.2
小特集 福島瑞穂				
福島 瑞穂	市ヶ尾古墳群	1979	ガッシュ、岩絵具、紙	46.6×34.8
福島 瑞穂	鎌倉道（長津田）	1979	ガッシュ、紙	48.2×36.3
福島 瑞穂	子供の国	1979	ガッシュ、岩絵具、紙	46.6×34.8
福島 瑞穂	出港	1988	油彩、キャンバス	117.0×117.0
福島 瑞穂	THE BLUE HANDS	1992	リトグラフ、アクリル（手彩色）	65.0×50.2
福島 瑞穂	THE RED HANDS	1992	リトグラフ、アクリル（手彩色）	65.0×50.2

謝辞

この展覧会を開催するにあたり、多大なご協力をいただきました次の個人、関係機関に深く感謝申し上げます。（敬称略）

五十嵐英壽　福島瑞穂
岩瀬枝理子　前川澄枝
大竹秀達　宮本麻未
大崎清夏　山田隆
荻野アンナ
門田奈穂子　入江泰吉記念奈良市写真美術館
北井一夫　公益財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団
栗林阿裕子　國領經郎顕彰会
小島昇　浜口タカシ写真事務所
斎藤和土　株式会社美術著作権センター
佐々木勲　株式会社フレーベル館
中島麻人　株式会社ポプラ社
ヒサクニヒコ　株式会社やなせスタジオ
浜口隆子　横浜美術館
林義勝

展覧会情報

横浜市民ギャラリーコレクション展2025

コレクションの地層

Historical Layers of the Collection

横浜市民ギャラリー 展示室1、B1
2025年2月21日（金）～3月9日（日）
10:00～18:00（入場は17:30まで）
入場無料／会期中無休

主催：横浜市民ギャラリー
（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／西田装美株式会社 共同事業体）

関連イベント

■ワークショップ
「絵画の地層、ことばの地層」

2月24日（月・休）13:30～16:30
会場：4階アトリエ
講師：大崎清夏（詩人）
対象：中学生以上

■おしゃべりの日＠コレクション展

3月2日（日）、3月8日（土）各日14:00～16:00
会場：横浜市民ギャラリー展示室1、B1

本展では10名のボランティアが鑑賞サポーターとして活動しています。事前研修を行い、おすすめ作品の紹介文を執筆しました。また上記のとおり、鑑賞サポーターが来場者と作品を見ながら感じたことをお話したり、おすすめ作品の紹介を行うイベントを開催します。

鑑賞サポーター：新井紀子、上原玲子、大神尚乃、小泉成史、小岩敏之、鈴木裕之、関根知子、髙橋大、古澤圭子、星野美和子

■ハマキッズ・アートクラブ
「横浜市民ギャラリーまるごと探検ツアー」

3月2日（日）10:30～11:40
会場：横浜市民ギャラリー展示室1・B1、収蔵庫ほか
講師：河上祐子（横浜市民ギャラリー学芸員/エデュケーター）
対象：小学3～6年生

学芸担当・執筆：河上祐子（p.7、8、12）、齋藤里紗（p.4、11）、伊藤ちひろ（p.10）
デザイン：宮川洋平（bulwark）
印刷：株式会社野毛印刷社

編集・発行：横浜市民ギャラリー（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／西田装美株式会社 共同事業体）
〒220-0031　横浜市西区宮崎町26番地1
TEL 045-315-2828　FAX 045-315-3033　https://ycag.yafjp.org/

©Yokohama Civic Art Gallery 2025